

日曜論壇

湯澤のり典子

2024.5.5



どの何げない会話にとも救われ、こんな

子どもを取り巻く環境は社会の変化とともに複雑多様化し、核家族化とともにコミュニティのつながりの希薄化も課題といわれている。地域の子育て支援は充実してきたものの、子育ての負担感はどうだろうか。

筆者の子育て時代を顧みると、さまざまな場面でたくさんの方に助けていただき、子どもたちは成長してきた。出産直後、子どもの顔をずっと眺めていられるほどいとわしく幸せだったが、外出もままならず日中2人だけの生活へと一変した。回覧板を届けてくれた隣人

にも会話に飢えていたのかと自分自身驚いた。

一方でベビーカーで外出した際に、通りすがりの人が優しく声をかけてくれたことがとてもうれしく、子育てを応援してもらっている、と実感したことを記憶している。思春期には子どもに正面から向

だ環境や人から離れるという分離体験や傷つきがありながらも、新しい環境を受け入れることになる。

里親は、その子どもとの暮らしを関係づくりから始める。一緒に暮らし始めてしばらくの間は、子どもも大人も日常のリズムをつくるのに一

ーを感じながら生活がスタートする。社会的養護を担う里親へ過剰な役割を期待される場合もあり、時には里親自身が社会から里親として特別なことを求められているように感じてしまい、相談したくてもちゅうちょしてしまうこともある。児童相談所をはじめ

子どもに関わる機関、特に幼稚園や保育園、学校などがチームとなって里親の養育を理解し、より一層丁寧なサポートしていくことが大切である。

チームで里親養育支援を

き合って受け止めてくれる人がいたこと、何より筆者自身が相談できる環境にあったことに今も感謝している。

このような乳幼児の子育てはその負担をある程度想像できるとは、ある日突然慣れ親しん

子どもに交際期間があるとはいえ、正式な受託後は24時間の養育に相当のプレッシャー

先日、里親家庭で暮らす子どもが通う小学校の教職員研修で、当センターの出席講座

を活用していただいた。研修終了後、校長先生が「学校もチーム養育の一員として里親と一緒に子どもを見守ってほしい」と言ってくれた。教職員が一丸となって里親制度を理解し見守っていくという体制に、里親はどんなにか心強いのではないかと思う。

公的養育の担い手ということとで、里親や里親家庭が特別なものとみられてしまいがちだが、地域の中で日々の暮らしを営む一つの家庭であるというのを忘れてはならない。地域社会で、里親養育への理解が深まり広がっていくことを願う。そして、里親養育も含め子育てに優しい社会であってほしい。

(栃木フォスタリングセンター 1長)